

## 牛群検定通信 No62

◇ 牛評を活用しよう！ ◇

遺伝的改良は優秀な種雄牛を利用することが基本ですが、現在は和牛受精卵による肉用子牛の生産なども酪農家の大きな収入源となっています。牛群検定成績である「牛評」を活用すると後継牛生産と肉用子牛の生産を上手に使い分けができます。

### 1 牛評とは？

牛群検定成績表の個体累計成績の中ほどの項目に、僅か2文字程度の小さな表示で「牛評」があります。牛評とは文字通り検定牛を評価した値で、1～10の10段階評価で10が最良となります。丁度、学校でもらう通信簿のようなもので、レベルの高い牛群でも、逆にレベルの低い牛群でも、どちらも1～10で評価されるように工夫されています。さて、この牛評は「乳量」と「遺伝改良」の2項目からなります。

#### (1) 牛評「乳量」

乳量の牛評は「305日補正乳量」を評価しています。305日補正乳量は、実際に搾っている乳量を成牛換算したものです。ですので、若い牛で沢山搾れている牛ほど「乳量」の牛評は高評価となります。

#### (2) 牛評「遺伝評価」

効率良く遺伝改良を行う指数に総合指数（NTP）があります。NTPのうち泌乳能力に注目したものが「産乳成分」になります。遺伝的に泌乳能力が優れているものほど「遺伝評価」の牛評は高評価となります。

## 2 牛評の活用

### (1) 後継牛生産と肉用子牛の生産の使い分け

これらの使い分けは、遺伝的能力をもとにするのが最も良い方法です。例えば牛評「遺伝評価」が6以上であれば、遺伝的に牛群の中で平均以上となる優秀な雌牛となりますから、性選別精液等を利用するなど積極的に後継牛生産に利用すると良いでしょう。

また、例えば牛評「遺伝評価」が4以下であれば、遺伝的には劣る雌牛ですから、和牛交雑種や和牛受精卵など肉用子牛生産に用いると良いでしょう。

「遺伝評価」と「乳量」の2つの牛評には強い相関がありますので、もし、無登録牛などで牛評「遺伝評価」が示されていない場合は、牛評「乳量」を使って前述のように使い分けすると良いでしょう。

### (2) 遺伝の力を発揮させていますか？

まれに牛評「遺伝評価」が8～10といった高能力牛であるにも関わらず、牛評「乳量」が1～3と極めて低い牛がいることがあります。これは育成も含めて、疾病などにより十分な遺伝力を発揮させていないことを意味します。こういった牛が多いときは、飼養管理全般を見直して周産期病などの健康管理を再点検してください。